

## JABEE 認定・審査に対する評価と課題



福田 敦  
論説委員  
日本大学・教授

来年、日本技術者認定機構（以下 JABEE）の認定・審査が実際に開始され 10 年を迎える。土木学会は、JABEE 設立当初から、土木工学分野、環境工学分野における技術者教育認定・審査の重要性を認め、最初の試行審査を近畿大学工学部土木工学科、鳥取大学工学部土木工学科で受け入れるなど、他の学協会に先んじて JABEE 認定・審査に積極的に取り組んできた。同時に、主要幹事学会の一つとして審査員の育成、認定審査基準策定、国際化への対応など JABEE 自体の確立においても、主導的な役割を果たしてきた。

この間、土木工学分野、環境工学分野では、高等専門学校専攻科を含む 70 のプログラムが認定を受けており、JABEE 認定審査が教育改善の仕組みとしてある程度定着してきたと評価できる。その一方で、JABEE 認定審査に対しては、未だに批判的な意見も聞かれており、今後のあり方に関して、改めて見直す時期ともなっている。

JABEE に対する批判の幾つかは、JABEE 認定審査に対して、当初、関係学協会、関係者の間にあった認識の違いから生じた誤解に基づいているようである。その一つは、幾つかの学協会が産業界からの要請に応じて卒業生の技術者としての質の保証に重きを置いたことから生じている。JABEE の認定・審査を受けるためには準備された統一的なカリキュラム内容を履修させる必要があり、各教育プログラムが目指す学際性や独自性を失うことになるのではないかとという危惧を抱かせた。本来、JABEE の目指すところは、定款の第 3 条にある通り”・・・大学等の高等教育機関が行う技術者を育成する専門教育プログラムの認定を行い、わが国の技術者教育の国際的同等性を確保する・・・”であり、継続的な教育改善を実施するシステムが存在していることを保証することである。この考え方は、評価認定制度の先輩である米国の ABET が 1996 年から取り入れた新しいクライテリアである EC2000 の考え方に近いもので、継続的な教育改善を実施するシステムが存在すれば、教育内容は自然と良い方向に改善されていくはずであるとする考え方に立脚しており、決して教育内容を縛るものではなかった。事実、独自性を持つ多くの教育プログラムが認定を受けている。

もう一つの誤解は、平成 12 年の技術士法の改正で JABEE 認定を受けたプログラムの修了生に対して、技術士の一次試験が免除されることによって生じた。このことが受審プログラム側にとって JABEE 認定を受ける一つの動機となったことは事実であるが、JABEE が資格付与の要件のように認識され、批判されたのは大きな誤解であった。未だに、JABEE 認定学科の修了生の技術士一次試験の合格率を持って、JABEE 認定審査の良否が議論されているが、このような議論は本質的に誤っている。

さて、それでは、JABEE 認定審査を通じて、具体的には技術者教育の何が変わるのであるだろうか。自身が所属するプログラムでの経験に基づけば、基本的にはこれまで通りのことをしているだけで、殆ど変わっていないというのが結論である。私の所属する学科は、いわゆる弱小学科のため、これまでも教育改善の取り組みを継続的に実施してきた。JABEE 審査を受けるに当たっては、これらの教育改善の取り組みを、JABEE の基準に当てはめて整理しただけで、特別に新たなことをしたわけではない。ただし、これまでは教職員が各自の判断で行ってきたことを、互いに確認できるよう透明化し、コミュニケーションに密にし、さらに社会や学生の意見も積極的に取り入れることで、一つの教育プログラムとしての取り組みに昇華できた点大きな違いである。この結果、教育に対する教員の意識は格段に向上し、課題や新しい取り組みが教員間で共有化されるようになり、改善が確実に実施されるようになった。他の多くのプログラム関係者も、同様の感想を持っているのではないかと思う。

現在、JABEE では、審査の簡素化と合わせて、新たな基準の改定を進めており、この中で修了生の学士力 (Graduate Attributes) を保証する観点から、具備すべき知識・能力に関して「学習・教育到達目標」として見直しを行っている。ここで、課題となるのは、学士力を何で具体的に評価し、どのように改善に繋げるのかということである。土木学会の場合、一つのアイデアとして、土木学会認定技術者資格の 2 級技術者試験をプログラム単位で修了生に受験させ、その結果を技術推進機構が集計して各プログラムに提供することが考えられる。各プログラムは設問毎に正答率が得られれば、学士力を評価することができ、改善に繋がっていきえると考えられる。ただし、そのためには土木工学分野における学士力とは何かについて改めての議論が必要であると考えられる。